

教 育 長 様

校番 92 広島県立尾道商業 高等学校

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校  
平成30年度 報告書**

**研究の概要**

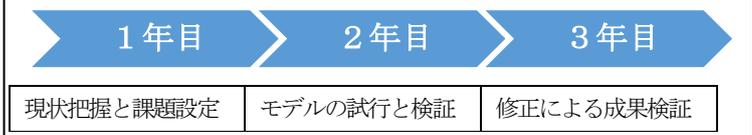
**研究の目標**（※計画書に記載したものを再掲）  
 学校全体で育成する資質・能力の明確化し、尾商学のカリキュラム改善を行い、資質・能力の評価方法を検討し、効果的で有用な評価システムを構築する。また、本校のスタンダードについて、生徒が目標及び課題を設定し、その目標や課題解決に向けて探究的な活動を行い、その実現に向けて一層努力するようにし、実践的な検証を行う。さらに、生徒が、本校の教育活動に一層主体的に努力し、よりよいキャリア形成を図るようになる。

**研究内容**（※対象，時期，方法を含む）  
 本研究を行うに際し、改善主義に基づいたアクション・リサーチによる着実な進歩とするために、3年間の研究の土台を作り、エビデンス・ベースに基づいた仮説検証による着実な研究を目指すことにした (Tyler, 1948)。

**1 総合的な学習の時間等における「探究的な学習」の充実について**

本事業の開発校として決定した後、6月に、各学年1単位の学校設定教科である尾商学（1年次：尾商学Ⅰ，2年次：尾商学Ⅱ，3年次：尾商学Ⅲ）を総合的な学習の場として見直し作業を行い、年間計画表及び全体計画、年間計画等を策定した。ただし、本年度は、実質的に6月から計画の立案をはじめ、7月から実際の授業への取組を行った。そのため、表1に示したように、3年後を完成年度として、1年目は現状を把握し課題を設定しながら、本プロジェクトの土台作りを行うことにした。

表1 3年間の研究の流れ



**(1) 系統的な指導体制の確立**

本校では、学校が求める生徒像や水準を重視し、Project-based learning with standards(以下、PBLs と略す。) (Lenz et al., 2015) の考え方に基づいて研究を行った。学校が目指す生徒像を生徒に分かり易く提示するために、資格と資質・能力にスタンダード(何時までどのような資格や資質・能力を身に付けてほしいか示したもの) (Larmer et al., 2015) と尾商検定(規範意識、道徳的価値、道徳、ストレスマネジメント、敬語、礼法等)を策定して、生徒が目標を設定し易い教育環境に改善した。表2に示したように、1年間を3つのフェーズ(①キャリア設計フェーズ、②探究フェーズ、③発表フェーズ)に分け、各フェーズに主となる活動を生徒に明示し、年度末の発表(成果物)を意識させ、下記のような工夫を行い、達成感を体験できる体制にした。高校3年間の尾商学の展開は、表2に示したように、2つのプロジェクトを主にして、目標と計画を設定させて取組ませた(Eberly et al., 2013)。第1のプロジェクトは、「探究」であり、テーマを決めて探究活動を行わせた。第2のプロジェクトは、「資格」「資質・能力」(次年度から「教科」も加える。)であり、学校で求める水準を明確化したスタンダードに基づいて目標を設定し、単に可否

表2 1年間フェーズパターン：スタンダードと探究

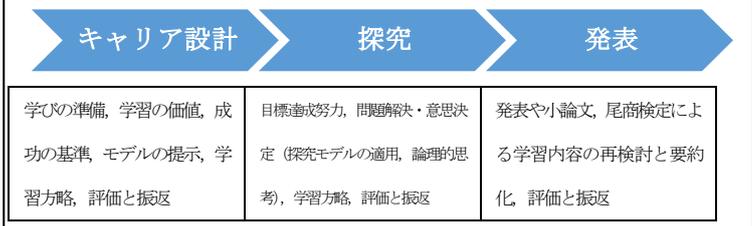


表3 高校3年間のプロジェクトの内訳

プロジェクト	1年次	2年次	3年次
スタンダード	スタンダード(資格、資質・能力)による目標、計画、実行、振り返等		
探究テーマ	自己探究	社会探究	自己実現・地域探究

ではなく点数等の目標を設定させて、達成感を覚えて諦めないで取組が継続できるようにした。また、Persons (1909) らの考え方に基づいて、表3に示したように、1年次は自分自身に関する視点から探究し、2年次は社会に関する視点から探究した後、3年次は、地域社会に興味を持ち地域社会に貢献できる人材を育てるという観点から、自己実現と地域社会について探究させることにした。

第1に、7月に、将来設計を考えさせた後、逆向き設計の考え方に基づき (Wiggins & McTighe, 2007)、本校で目指す生徒像とスタンダード (資格と資質・能力) を生徒に提示し、スタンダードと探究との両者のプロジェクトを考えさせた。第2に、探究のプロジェクトのテーマの探究が、学校生活での学び (資格スタンダード等) と関連付けることができるように、「心マップ」を作成させて、生徒の心の中の夢を1つのキャリア・ストーリーとなるように統合的に考えさせた上で、ベースとなる探究活動を体験させた (Cochran, 1997)。従来は、教科学習や学校行事等を自己のキャリア・ストーリーに統合して考えさせる場面が少なかったため、IDパスポートを用いて教師との対話による見直しや深い学びの機会を設定した。第3に、PBLsを活用し、目標と計画、評価を一体化させ、PDCA サイクルとなるように探究に取組ませた (国立教育政策研究所, 2011)。主体的に探究活動に参加しない生徒には、7月に、個人の希望にあわせて6種類の「ミッション・シート」を配布し、手続的知識を体験的に学ばせ、探究活動を深めて将来のレジリエンスのための基礎力の伸長を図った (板柳, 2016; Petty, 2018)。第4に、教師との「対話」による学びを徹底して行うために、7月に、「IDパスポート」を作成し、個別支援体制を整備した。10月にも、よりよい探究をさせるために、「IDパスポート」を用いて教師と生徒とが対話による学びができるようにさせたり、発表等による学び合いをさせたりして、プロジェクト (探究とスタンダード) への取組内容等を修正させた。また、資格についても可否による成功・失敗経験にならないようにするために、得点での伸びに意識が行くように対話を進めるように呼びかけた。第5に、プロジェクトの推進 (探究とスタンダードの努力) や進路ガイダンス等を経験しながら、8月に、「心マップ」を見直させ、発表を通して振り返りさせるとともに、生徒間での学び合いをさせた。これらの活動を通して、夢の実現に必要な課題を多角的に考えさせて、理想の自己と現在の自己との差を克服できるように取組ませて、キャリアに関する宣言的知識を深めさせた。第6に、「エッセンシャル・クエッション (EQ)」を策定し、授業への魅力を高めて資質・能力の育成を意識させる方向目標を提示した (McTighe & Wiggins, 2013)。第7に、パネル発表と小論文を行わせた。小論文においては、作成例を配布して、将来の夢が直接商業系でない場合でも、商業系の資格や学習内容と関連付けることができるモデルを提示したり、実証方法の1つとして質問紙法を用いて調査研究を行うモデルを提示したりした。そうしたモデルを通して、1年次は自分自身に関係した課題について、2年次は社会 (会社、学校等) に関連した課題について、3年次は自己実現や地域社会の産業や観光に関係した課題について、それぞれ探究するようにした。

## (2) 尾商学

尾商学は、1年次から3年次まで貫く授業 (各1単位) であり、図1に示したように、教科学習や学校行事等に関して行われる基本的探究活動等に基づいて発展的に探究を行う学修の場として位置づけた。尾商学では、基礎学力 (国語、数学、英語、時事) について朝学習を行うとともに、尾商検定によりビジネス教育を行っている本校の生徒が知っておくべき内容を習得し、尾商デパートにおいてビジネス教育の実践力を養うとともに、教科学習等で行う基礎的探究活動を統合・発展させたものとして、尾商学において探究のためのテーマを設定 (1年次: 自己探究, 2年次: 社会探究, 3年次:

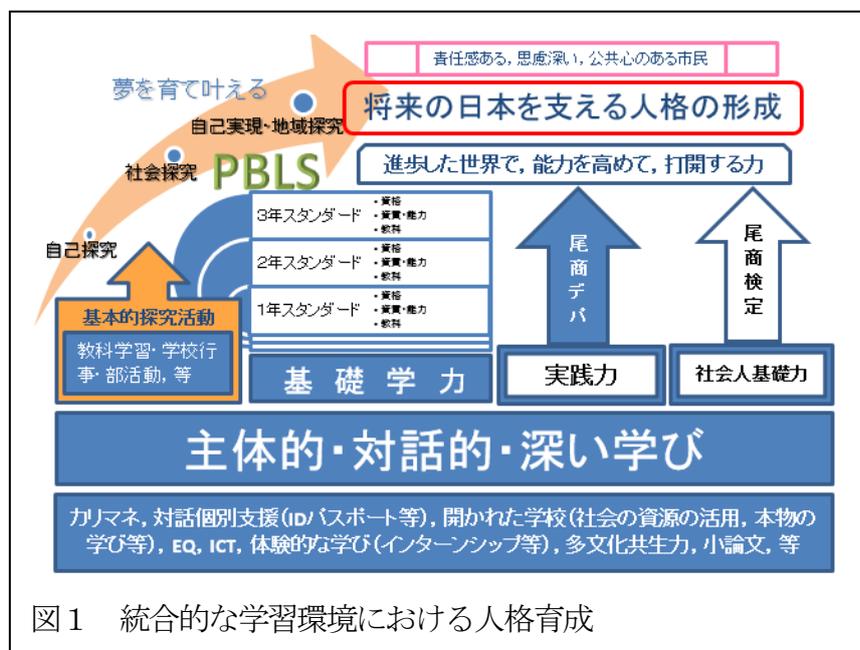


図1 統合的な学習環境における人格育成

自己実現・地域探究) し、統合的に探究することにした。こうした学びを通して、将来の夢を育て、その夢を叶えるために必要とされる、社会に出て通用する基礎学力、社会人基礎力、資質・能力を養い、体験的・実践的な学びを通して本物の力を培うとともに、多文化とAI等による社会の変化に必要な資質・能力を育成し、将来地元を愛し地域社会に貢献して、将来の日本を支える人材を育成することを目指している。

### (3) カリキュラム・マネジメントの活用

本校では、表4に示したように、学校行事や教科等において、本校で作成した資質・能力を伸ばさせるために有用な授業はもちろんのこと、いわゆる「まちクラブ」のように発展的に自由に探究をしようとするような学習内容が数多く行われている。こうした教育内容には、生徒が尾商学における探究でテーマとして活用できるような学習内容が数多くある。しかし、そうした教育内容は、各教科、分掌等で独自に工夫しているところがあり、教員全員が、それらの取組を理解しているわけではない。そこで、尾商学における探究活動のテーマとして、こうした教育活動を発展的に活用できる状況にしていく必要があり、今年度は、各学年や分掌、教科における取組について、現在実施されている教育内容が、本校で育成したい14の資質・能力の中でどの資質・能力を育成するために寄与しているのかを、教科や分掌で検討させ、全職員が把握できる状況にすることを企画した。

それと同時に、探究活動の充実と資質・能力の育成という観点から、次年度の学校行事や教科学習等について計画を再考させ、その内容についても全職員が把握できる状況にすることを企画した。現在、その資料の作成を依頼している段階であるが、次年度、尾商学で生徒が探究活動のテーマを考えるための資料として、また、尾商学の担当が生徒に探究活動のテーマや設定や深い学びへの指導に行かせるための資料として、準備を進めている。さらに、この取組によって、教科横断的な取組や外部講師の選定、学年や分掌の行事等の活用が進み、カリキュラム・マネジメントが進んで行くことを期待している。

そうした教育活動には、具体的には、次のようなものがある。例えば、尾商デパートに係る企画（商品開発、

地域児童施設との連携事業、中学生への礼法指導及び販売実習、観光英語、ネット販売、等）、面接指導（外部講師による個別指導）、校外学習（商工会議所及び観光課による講話等）等の取組がある。また、進路指導におけるインターン

表4 尾商学との繋がる学校行事の例（カリマネ）

番	項目	内容
1	尾商デパート	商品開発、地域児童施設との連携事業、中学生への礼法指導及び販売実習体験会、観光英語、ネット販売、地域企業とのコラボ企画、等
2	礼法指導	外部講師講演会、実技指導、個別面談、等
3	校外学習	商工会議所及び観光課による講話等の取組
4	校外研修	企業研修、OB・OG講話、札勘等の技能講習、インターンシップ、等
5	社会人講話	公認会計士講話、税理士講話、経営者講話、銀行員等の講話、等
6	進路説明会	職種別説明会、学校別説明会、等
7	国際交流	観光英語、姉妹校交流事業、販売英語、等

シップ、校外研修（企業研修、OB・OG講話、札勘等の技能講習、職場体験、等）、教科に係る社会人講話（公認会計士講話、税理士講話、販売店経営者講話、販売に関する講話、等）、進路説明会、等の取組がある。

実際、尾商学では、図2に示したように、PBLsを用いて、学校での学びを、探究を中心としてまとめ、本校で育成したい資質・能力を考えながら、教科学習や進路指導、生徒指導、学校行事等に関連付けた指導ができるようになることを目指しているが、上記の取組を通して、尾商学の探究がよりよいものになるだけでなく、教科学習や学校行事等に対する新たな価値が生徒自身によって発見できる機会となることを期待している。

また、尾商学において、探究活動を支援する体制を強化するために、教育環境の整備として、先述の通り、尾道の町の産業や観光についてどのようなテーマを探究すればよいのかについて外部講師への講話を依頼して実施した。また、尾商学で探究活動を行うためには、各教室にキャリアやスタンダード等に関する書籍の配置を行ったり、パソコン教室に昨年度の求人票（PDFファイル）を置いたりする等して、プロジェクト（スタンダードと探究）に関する基本的な調べ学習が簡単にできるように教育環境の改善に努めた。

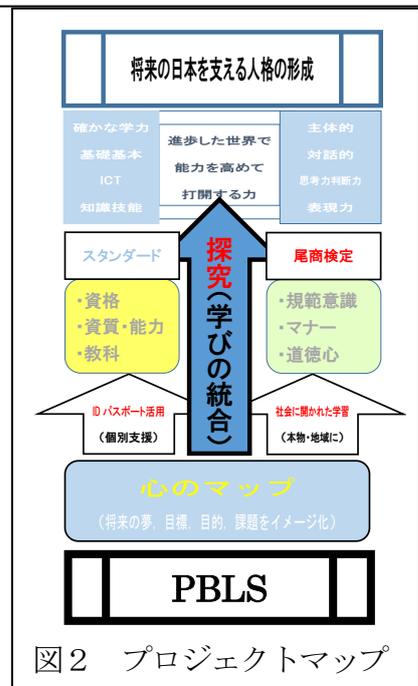


図2 プロジェクトマップ

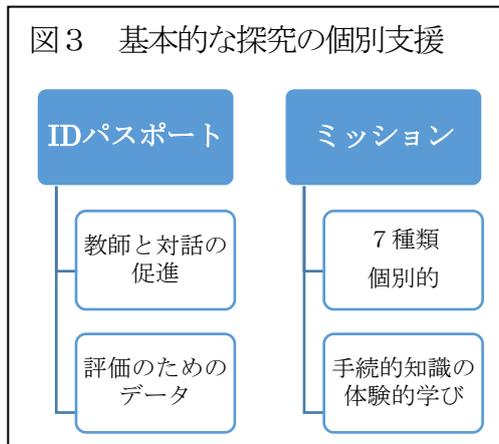
### (4) 社会の資源の活用（外部講師による講演会）

本校では、数多くの社会の資源をすでに活用してきた。そのため、他の教科における外部講師の活用状況を総合的に考慮に入れ、今年度、尾商学では、外部講師による講演会として、①小論文指導、②電話応対・サービス接遇指導（穴吹医療福祉専門学校水谷郁恵先生）、③尾道の観光（尾道市立大学稲田全示先生）、④尾道の産業（福山大学平田宏二先生）、⑤将来求められる資質・能力（岡山理科大学森敏昭先生）等に関する外部講師の活用を企画した。稲田全示先生の講演会は日程の都合で中止となったため、尾道の産業と観光等については、平田宏二

先生からまとめて講演してもらった。プロジェクトにおいて、尾道の観光や産業に係ってテーマを設定した場合、どのようなことが探究できるのか、大学生による探究の例を紹介してもらい、産業データを入手した場合どのように解釈をすればよいのか、大学生による解釈の例を紹介しながら分析・判断等の例を説明していただいた。

### (5) 「個々の生徒にその指標に関わる目標を具体的に考えさせ、個別指導を行う」

7月に、プロジェクトシートにおいて、ドリーム、ビジョン、ベースメント等を具体的に考えさせた後、心マップにおいて、探究とスタンダードを統合的に考えさせた。それらを基に、IDパスポートを配布して、プロジェクトの目標、課題、計画等を記入させ、自己の学習遂行状況や先生との面談（対話）等の記録を簡単に記入させた。本年度は、キャリア設計フェーズにおいて、手続的知識を体験的に学習させる時間を取れなかったが、自分の力で探究できない生徒に対して、7つのミッションを準備し、キャリア設計に基づいてキャリア選択を自分自身で行わせながら探究活動に取組ませることにした。また、そのミッションに従って探究を行えば、探究を行うための基本的なスキルが身に付くことができるようにした。



### (6) 「尾商検定として生徒にも具体的に分かる指標」

尾商検定は、ビジネス教育を行っている本校の生徒が知っておくべき内容をまとめたものとして作成した。これは、「責任ある、思慮深い、公共心のある市民の育成」（キルパトリック、1969）を目指すものでもある。具体的には、尾道商業高等学校、規範意識、学校のきまり、生活規律、ストレスマネジメント、道徳的価値、敬語、礼法指導に関するものである。尾商学においては、「平成30年度尾商検定教本」（10頁）と「平成30年度尾商検定問題集」（14頁）に取組ませて、3年生については1月に、1・2年生については3月に検定試験を実施した。本年度は、尾商学の授業時間数が限られていたため、筆記だけを実施し実技は評価に含めなかった。

### (7) 小論文

尾商学では、発表フェーズにおいて、表現力を高めるとともに学習内容のリユーズとして、パネル発表とともに小論文を書かせている（Petty, 2018）。4～5月に小論文指導を行うとともに、発表フェーズで探究のまとめとして、様式及びモデルを提示した上で小論文を書かせている。探究フェーズでは、図書館やインターネット、新聞等を用いて調べ学習を行わせている。本校はNIEの指定校として、朝学習や教科において新聞を活用している。探究での学びが、アンケート調査等を実施したり専門的な著書を活用したりしたものもあり、AO入試等に活用できる水準にまで高まった取組も見られた。

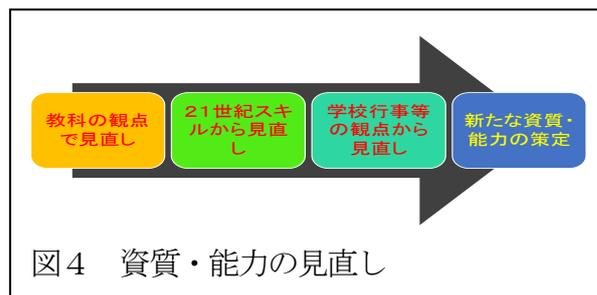
## 2 資質・能力の評価について

### (1) 研究の仮説

尾商学において、本校で育成したい資質・能力を具体化し、尾商検定として生徒にも具体的に分かる指標として提示するとともに、個々の生徒にその指標に係る目標を具体的に考えさせ、個別指導を行うとともに、全教職員がその目標実現を考慮に入れて、教科指導や進路指導、生徒指導、学級経営、学校行事、等を改善して工夫して行えば、生徒の一人一人の資質・能力は向上し、学習に対してより学習意欲が高まり、資格等の取得も向上し、充実した高校生活を送ることができるであろう。

### (2) 「本校で育成したい資質・能力の具体化」

資質・能力は、基礎的で汎用的なものであり、学校全体の教育活動を通して、育成すべきものであるとともに、本来的に、資質能力を直接育成する教育活動は行えないとする見解（Beyer, 1988, ら）に基づいて、図4に示したように、見直し作業を行った。そのため、本校で育成したい汎用的な資質・能力を策定し、その資質・能力のルーブリックをもとに、各教科等で指導内容に適合させ



たルーブリックにして使用することを考えた。6月に、昨年度策定した「育成したい生徒像」及びその資質・能力について、教科主任会議を通して検討を重ねた。次に、7～8月に、キー・コンピテンシー等の21世紀スキルに関する研修会を実施し、全ての教科や学校行事等について評価できる指標となっているかどうかを検討した。その結果を基に、9月に、本校で育成したい資質・能力を再検討し、全教科及び学校行事で使用できる14項目からなる平成30年度版資質・能力ルーブリックを作成した。さらに、10月に、全教員が使い易いものになるように、項目の見直しを行い、表5に示したように14の資質・能力を11月に策定した。

### (3) 14項目からなるルーブリックの特徴

11月に、本校で育てたい14の資質・能力を最終的に策定し、2月に、1年生を対象にして、教師による評価と生徒による自己評価を実施した。その結果、次のことが分かった。

#### ① 評価者間信頼性

本校で策定した14項目からなるルーブリックは、教科や学校行事等を網羅的に捉えた汎用性を目指している。そのため、本校では、先述のとおり、生徒の資質・能力を正確に捉えて評価することは難しいと考え、実際の評価場面では、この14の資質・能力のルーブリックを考慮に入れて、教科特性(単元内容等)を考慮に入れながら、ルーブリックを作成して実施することにした。

本校で育成したい14項目からなるルーブリックについては、2月に、1年生を対象にして資質・能力を関連教科担当及び学級担任等に評価するように依頼した。その結果、評価者間の信頼性は表6に示したとおりであった。この表を見れば分かるように、9つのルーブリックで有意であったが、係数はせいぜい.4程度しかなく、生徒を評価する数値としては使える水準ではないと言える。このことから、予測していたように、教師が生徒の資質・能力を直接的に評価しようとしても、評価者間の信頼性の観点から安定した評価を得ることは難しく、実際に生徒の資質・能力を測定した評価とは言えないことが証明されたと言えよう。

#### ② 低い線形関係

14のルーブリックについて、教師の評価と生徒の自己評価との間の相関係数において、統計的に有意な相関が見られたルーブリックは、時間管理能力( $r=.25$ )だけであった。このことから、この14のルーブリックは、教師による評価と生徒による自己評価とは時間管理能力以外基本的には一致していないと言える。第2に、各ルーブリックの重相関係数は表7に示したとおりである。教師の評価については、ランク落ちのために、重相関係数を算出できない場合があり、具体的には、創造力と読解力のルーブリックであった。それに加えて、教師については、重相関係数から、コミュニケーション力、企画設計力、自己コントロール力、学び方、時間管理能力、数的処理力以外は、.4なく、線形関係が低いと言える。他方、生徒自己評価については、コミュニケーション力、協働力、企画設計力、思考力、判断力、表現力、創造力、リーダーシップ力、自己コントロール力以外は、.4なく、線形関係が低いと言える。このことから、教員及び生徒の評価は、その内的構造を予測しにくいと考えられる。

#### ③ 因子構造

表5 資質・能力

番号	資質・能力名
1	コミュニケーション力
2	協働力
3	企画設計力
4	思考力、判断力
5	表現力
6	創造力
7	リーダーシップ力
8	自己コントロール力
9	学び方
10	時間管理能力
11	数的処理力
12	読解力
13	情報リテラシー
14	健康管理能力

表6 評価者間信頼性

ルーブリック	K(2次)	有意性	備考
コミュニケーション力	.20	**	
協働力	.05		
企画設計力	-.09		
思考力、判断力	.26	**	
表現力	.19	**	
創造力	—		評価者不足
リーダーシップ力	.37	**	
自己コントロール力	.31	**	
学び方	.31	**	
時間管理能力	.05		
数的処理力	.42	**	
読解力	.14	**	
情報リテラシー	.00		
健康管理能力	-.15	**	

表7 各ルーブリックの重相関係数

ルーブリック	教員	生徒
コミュニケーション力	.42	.52
協働力	.38	.46
企画設計力	.53	.43
思考力、判断力	.32	.51
表現力	.29	.42
創造力	—	.52
リーダーシップ力	.29	.44
自己コントロール力	.58	.42
学び方	.54	.44
時間管理能力	.44	.33
数的処理力	.58	.35
読解力	—	.33
情報リテラシー	.31	.36
健康管理能力	.29	.36

ルーブリック間の因子構造は、評価者のルーブリックに対する見方であると考えられる。ここでは、この観点から推測を働かせて解釈を試みたい。

教師用ルーブリックの因子構造は、表8に示したとおりである。この結果から見れば分かるように、教師用ルーブリックの因子分析結果から、第1因子「企画設計力」は、キャリア設計に関するルーブリックからなっている。第2因子「制御力」は、探究活動における制御力であり、表現力が含まれている。表現力は、他の分析結果から、教師が生徒との対話において発表に主に取組んでいたと考えられる。第3因子「対話的思考力」は、思考力・判断力と協働力とともに、健康管理力が含まれている。教師から見ると、健康管理力は健康面についてよく考えて判断する内容であり、思考力・判断力と類似した能力として認識されたと考えられる。第4因子「意思疎通力」は、コミュニケーション力である。このことから、教師は、企画・設計と探究を区別している。また、教師は、協働力・思考力を統合して考えているが、協働的な学びにより思考が深まると考えている。さらに、計画に従って自己統制して実行できることと、発表の準備を時間内にできることを統合的に考えている。さらにまた、リーダーシップ力は、全ての面で能力の高いことを示す力であるとみなしていると言えよう。

表8 教師用ルーブリック因子構造

教師用ルーブリック	設計	制御	対話思考	意思疎通
数的処理力	.95	.05	.10	.02
学び方	.70	.21	.17	.02
企画設計力	.45	.41	.42	-.10
情報リテラシー	.45	.06	.26	.17
時間管理能力	.30	.57	.29	.00
自己コントロール力	.28	.71	.16	.32
表現力	-.04	.54	.00	.07
思考力、判断力	.24	.28	.42	.10
健康管理能力	.14	.19	.50	-.02
協働力	.12	-.09	.77	.28
コミュニケーション力	.05	.21	.15	.92
リーダーシップ力	.23	.30	.29	.24

次に、生徒用ルーブリックの因子構造は、表9に示したとおりである。この表を見ればわかるように、分析結果から、第1因子「探究力」は、創造力、学び方、時間管理能力、数的処理力、表現力、思考力・判断力、情報リテラシー、リーダーシップ力、企画設計力からなっていると言える。第2因子「自己制御力」は、健康管理能力と自己コントロール力であり、管理・制御に関する能力と見なしていると考えられる。第3因子「理解力」は、読解力と協働力とであり、多くの生徒にとって自分ひとりで考えることは難しく、独力で資料等を読み取ることが難しく、グループ等での学びを通して理解していると認識していると考えられる。第4因子「意思疎通力」は、コミュニケーション力である。このことから、生徒は、理解力、自己制御、探究力を区別していると考えられる。

表9 生徒用ルーブリック因子構造

生徒用ルーブリック	探究	自己制御	理解	意思疎通
創造力	.69	.13	-.02	-.03
学び方	.69	-.02	.03	-.02
時間管理能力	.55	.05	-.14	.14
数的処理力	.55	-.13	.15	.07
表現力	.48	-.11	-.07	.44
思考力、判断力	.41	-.05	.38	.09
情報リテラシー	.30	.14	.20	.04
リーダーシップ力	.45	.37	-.16	.07
企画設計力	.37	.37	.20	-.27
自己コントロール力	.13	.46	.15	.04
健康管理能力	-.05	.81	-.17	.08
読解力	-.02	-.15	.81	-.01
協働力	-.11	.27	.44	.23
コミュニケーション力	-.02	.10	.06	.83

意思疎通力については、生徒も教師も、他の資質・能力とは異なる力であると認識していると言える。これは、今日の教育において、意思疎通力が1つの大切な独立した能力の1つであると、教師も生徒も認識していることを示していると言える。今後、各教科等で探究活動が重視して取組まれれば、意思疎通力と同様に、教師についても生徒についても、より精緻化された探究の構造が形成されていくことができると期待している。

#### ④ 妥当性

本校で育成したい14の資質・能力のルーブリックの教師の評価は、これまで述べていたように、十分に信頼できるものとは言えない。しかし、教科や学校行事等の教育活動の場において、これらの14の資質・能力に基づいて、キャリア・マネジメントを推進していくためには、具体的な場面でのルーブリックを作成する土台として使用することができるであろう。

##### ・学業成績の伸びとの関係について

目的変数を2学期中間と1学期中間との間の得点の伸びとし、説明変数を14の資質・能力のルーブリックとして正準相関分析を行った。その結果は、生徒については表10に、教員については表11に示したとおりである。これらの結果について、正準相関係数が、便宜的に3以上の場合を比較すると、次のようになる。教員については、F1から数学的処理力が高いと数学Iの得点が高い一群がいることが分かる。次に、F2から表現力が高いとビジ基礎の得点が高いが、国語表現とコミュニケーション英語Iの得点は低い一群がいることが分かる。他方、生徒については、F1から企画設計力と学び方、数的能力が低く、読解力が高いと数

表10 学業成績との関係（生徒）

変数	ルーブリック(教師用)	F1	F2	F3	F4	
説明	コミュニケーション力	-.05	.18	.40	-.44	
	協働力	.06	.22	.12	.02	
	企画設計力	.38	-.30	-.16	.20	
	思考力、判断力	.24	-.05	.43	.47	
	表現力	.14	.95	-.23	.53	
	リーダーシップ力	-.03	.33	-.62	-.56	
	自己コントロール力	-.09	-.18	.50	.07	
	学び方	.08	.07	.46	-.44	
	時間管理能力	.16	-.13	-.14	-.31	
	数的処理力	.43	.02	-.62	.36	
	情報リテラシー	.07	-.08	.12	-.07	
	健康管理能力	.04	-.04	.04	-.21	
	目的	国語総合(2末)	-.07	-.57	-.91	-.92
		数学I(2末)	.59	.12	.84	-.76
コミュ英語I(2末)		.26	-.79	-.33	1.14	
ビジ基礎(2末)		.38	1.03	-.58	.48	
正準相関係数		.72	.33	.21	.07	

学Ⅰの得点が高い一群がいることが分かる。次に、F2から健康管理能力が高いと国語総合の得点が高い一群がいることが分かる。

これらの結果は、生徒については合理的に解釈することは困難であるが、他方教員については数学力が数学の点数と関係していたり、表現力が商業の得点と関係していたりするなど合理的に解釈することができる。このようになったのは、教師は教科の得点の結果に基づいて資質・能力を評価していたと考えられる。

・資格取得との関係について

資格の取得とルーブリック評価の関係を調べるために、資格の取得状況についてクラスター分析を行った。便宜的にクラスター数を11として、ウォード法を用いて4つの全商資格（簿記実務検定2級、簿記実務検定3級、情報処理検定3級、英語検定3級）の合否結果をもとに分析した。

評価者間の信頼性が低く、重相関係数も低かったので、詳しく分析することは控えたが、次のような傾向が見られた。クラスターごとの平均値を算出し、表12の表において、下方にいくほど「一貫して上昇」しているか、下方に行くほど「一貫して下降」しているかで分類し、それらに該当する人数を調べた。その結果、表13のとおりであった。この結果から、教師は、カテゴリー内において比較した場合、資格を多く取得しているほど、資質・能力の評価を高くする傾向があると言えるであろう。他方、生徒については、クラスター1とクラスター2の場合のように全商英語検定3級の合格によって資質・能力の評価が低くなる傾向が見られた。また、この傾向は、簿記実務検定2級に合格しているクラスター9とクラスター10とクラスター11のカテゴリーでも若干同様の傾向が見られた。さらに、教師が採点した場合、クラスター5は、簿記実務検定3級だけに合格している場合であるが、そのカテゴリー内で一番平均が高い場合が3つあり、一部の生徒にとって簿記実務検定3級に合格することが教師や生徒の資質・能力に対する評価に影響する可能性があると考えられる。

表11 学業成績との関係（教員）

変数	ルーブリック(教師用)	F1	F2	F3	F4
説明	コミュニケーション力	-.05	.18	.40	-.44
	協働力	.06	.22	.12	.02
	企画設計力	.38	-.30	-.16	.20
	思考力、判断力	.24	-.05	.43	.47
	表現力	.14	.95	-.23	.53
	リーダーシップ力	-.03	.33	-.62	-.56
	自己コントロール力	-.09	-.18	.50	.07
	学び方	.08	.07	.46	-.44
	時間管理能力	.16	-.13	-.14	-.31
	数的処理力	.43	.02	-.62	.36
	情報リテラシー	.07	-.08	.12	-.07
	健康管理能力	.04	-.04	.04	-.21
	目的	国語総合(2末)	-.07	-.57	-.91
数学Ⅰ(2末)		.59	.12	.84	-.76
コミ英語Ⅰ(2末)		.26	-.79	.33	1.14
ビジネス基礎(2末)		.38	1.03	-.58	.48
正準相関係数		.72	.33	.21	.07

表12 資格 (11 クラスター)

クラスター	簿記実務2級	簿記実務3級	情報処理3級	全商英語3級
クラ1	.00	.00	.00	.00
クラ2	.00	.00	.00	1.00
クラ3	.00	.00	1.00	.00
クラ4	.00	.00	1.00	1.00
クラ5	.00	1.00	.00	.00
クラ6	.00	1.00	.00	1.00
クラ7	.00	1.00	1.00	.00
クラ8	.00	1.00	1.00	1.00
クラ9	1.00	.00	.00	.14
クラ10	1.00	.00	1.00	.00
クラ11	1.00	.00	1.00	1.00

表13 資格 (11 クラスター)

クラスター	カテゴリー内	教師	生徒
1, 2	一貫して上昇	13	0
	一貫して下降	0	14
3, 4	一貫して上昇	8	12
	一貫して下降	5	2
5, 6, 7, 8	一貫して上昇	3	1
	一貫して下降	0	0
6, 7, 8	一貫して上昇	10	5
	一貫して下降	0	1
9, 10, 11	一貫して上昇	10	1
	一貫して下降	0	3

(4) 平成31年度作成した評価場面別の資質・能力のルーブリック

策定した資質・能力を基に、7月にキャリア設計フェーズについてポートフォリオ等を評価し、9月に探究フェーズについてポートフォリオと発表等を評価し、11月に発表等において、それぞれの評価場面に適したルーブリックを作成して評価を行った。

① 評価者間信頼性

ルーブリック評価について、評価のし易さから、リッカート評価の方がよいのではないかという意見が出た。ルーブリックは、学習者に自己の改善すべき具体的行動を示している。そこで、評価者間信頼性の観点から、ルーブリック評価とリッカート評価を比較した。その結果は、表14に示したとおりである。この結果から分かるように、ルーブリック評価は、適切に作成すれ

表14 ルーブリックとリッカート

番	種類	ルーブリック	K(2次)	有意性
1	ルーブリック	キャリア探究	.23	
2	ルーブリック	スタンダードへの努力	.74	**
3	リッカート	プロジェクトにおける探究活動によって、教科学習や資格学習が自己の将来の夢を実現したり将来社会で活躍するために必要であることを理解している。	.51	*
4	リッカート	キャリアデザインの中で、将来の目標を明確かつ具体的に書いている。	.37	
5	リッカート	キャリアデザインの実現するための方法を調べて、具体的にどのような進路に進めばよいのか調べており、分かり易く整理してまとめている。	.51	*
6	リッカート	キャリアデザインの設計が、長期的に見通して考えており、高校時代に培っておくべき学習内容や資質・能力や資格等について十分に調べた上で具体的な目標を設定している。	.45	*
7	リッカート	現在の自己の希望する進路だけでなく、他のほとんどの進路(進学、就職の両方)について調べて理解し、幅広い進路に関する知識を持っている。	.64	**
8	リッカート	スタンダードの「資質能力」「資格」や教科学習の目標・計画を具体的に書いた上で、その実現に向けて努力している。	.36	
9	リッカート	自ら進んで、キャリアについて目標や計画を立てたり、探究活動や発表等を行っている。	.37	*
10	リッカート	自己のキャリアの実現のために、資料を批判的に読んだり、自分自身についてよく考えたり、家族や先生に相談して、具体的に目標や計画等の見直しや修正を行っている。	.15	
11	リッカート	自己の進路を実現するためには、何をどのようにして調べて、何についてどのように努力していけばよいのか分かっている。	.63	**
12	リッカート	自己の進路実現のために、何事にも積極的に取組み、自ら進んで行動している。	.51	**

ばかなり高い評者間信頼性を持ったルーブリックを作成できることが分かった。

また、本校が求めている資質・能力を示している 14 のルーブリックと比較すると、こうして具体的な学習場面に適合したルーブリックを作成すれば、評価者間の一貫性が高いものが作成できると言えるであろう。

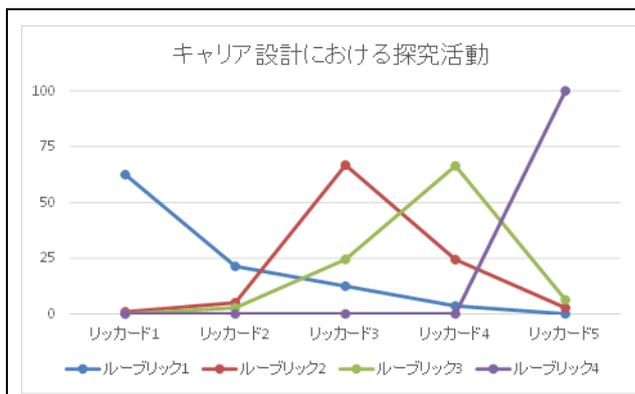


図5 キャリア設計に関する評価

ルーブリック評価「キャリア設計について、適切な目標を設定し、具体的な探究計画を立てて、主体的に探究活動を行い、自分自身や地域社会等の将来の可能性を広げる内容について述べている。」  
 リッカート評価「キャリア設計について、適切な目標を設定し、具体的な探究計画を立てて、主体的に探究活動を行い、自分自身や地域社会等の将来の可能性を広げる内容について述べている。」

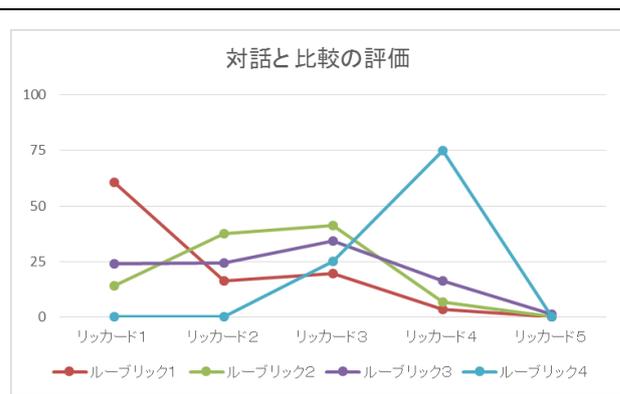


図6 対話と比較に関する評価

ルーブリック評価「自分のキャリア設計やスタンダードの目標や計画等について、先生等と話し合ったり、進路と自分の進路(希望先)と比較したり、見直したり考えたりして、どのように自分自身の目標や計画等が変わったのか具体的に述べるができる。」  
 リッカート評価「自分のキャリアやスタンダードの目標や計画等について、3人以上の先生等と話したり3つ以上の進路先と比較したりして、考えたり見直したりしたことについて論じている。」

### ② ルーブリックの順序尺度の検証

ルーブリック評価は、各水準の項目が異なっているため、基本的に名義尺度と言える。ルーブリック評価は、各水準の項目が順序性を持つように作成している。そこで、順位尺度であるリッカート評価を用いて、ルーブリック評価の水準の順序性を検討した。ルーブリック評価とリッカート評価との関係は、その項目内容によって特徴が異なっているが、図5に示したように、ルーブリック評価が的確に作られている場合は、各水準が明確に区別された分布になっている。しかし実際には、ルーブリックの項目内容によっては、ポートフォリオの項目内容に、評価者の推測が関与しえるような項目になると、図6のように水準間で明確に分かれた分布にならないことが分かった。このことから、ルーブリック評価を使用する場合には、作成したルーブリックが順序尺度となっているかどうかを確認して使用する必要があると言える。

### ③ ルーブリック評価に関する一貫性

キャリア設計とスタンダードについては、図5に示したキャリア設計のように、順序尺度であると考えられる。そこで、キャリア設計とスタンダードに関するルーブリックについて尺度構成を行った。その結果は、表15に示したとおりである。この結果から分かるように、尺度の一貫性を表す $\alpha$ 係数から、一定程度の信頼性を持った尺度を構成できたと言えるであろう。

表15 ルーブリック間の構造と $\alpha$ 係数

番号	ルーブリック	探究因子	表現因子	$\alpha$ 係数
1	キャリア設計について、具体的に適切な目標と探究計画を立てて、主体的に探究活動を行い、遂行結果を記録し、達成できた内容について述べるができる。	.88	.08	.89
2	自分のキャリア設計やスタンダードの目標や計画等について、先生等と話し合ったり、進路と自分の進路(希望先)と比較して見直したりより詳しく考えたりしたことについて、どのような話をして話の前後でどのように自分自身の目標や計画等が変わったのか具体的に述べるができる。	.77	.10	
3	スタンダードとキャリア設計について、今後の具体的な展望を持ち、その達成に向けて時期を明確化した行動計画について決意を述べることができる。	.76	.12	.70
4	話すことになっている内容を、言い方(声の大きさや明瞭さなど)を工夫し、図表等を用いてわかりやすくし、時間内に話すことができる。	.11	.55	
5	話している内容が、相手に伝わるように、理由や例を挙げて説得力のあるものにして、論理的に一貫性を持ち、的確に伝えるべき内容が適切に伝わるように話すことができる。	.11	.84	

### (5) ルーブリックの妥当性

表16を見れば分かるように、ルーブリックと内容が関連したリッカート項目との間に統計的に有意な関係が見られた。このことから、これらのルーブリックについて、一定程度の妥当性をもったルーブリックが作成されていることが分かった。他方、対話に関するリッカート項目が発表に関するルーブリック以外と負の関係が見られ、教員との対話が発表の仕方に関する内容となっており、探究等に対する対話が十分に行われていなかったと考えられる。

(6) 14の資質・能力のルーブリックと他のルーブリックの関連性

今年度の本プロジェクトの授業は、7月から開始する予定であった。7月豪雨の影響もあり、キャリア設計フェーズは、夏休み前の1時間で実施し、夏休みから探究活動を行うことにした。そのため、9月にポートフォリオを用いて、キャリア探究とスタンダード探究についてルーブリックを用いて評価を行った。次に、11月の発表フェーズにおいて、発表についてルーブリックを用いて評価を行った。最後に、1～2月の発表フェーズにおいて、小論文についてルーブリックを用いて評価を行った。それらで用いたルーブリック評価と2月に1年生に実施した14の資質・能力のルーブリック評価との間の関係を、偏相関係数を用いて調べた。その結果は、表16に示したとおりである。

表16 ルーブリックと関連リカード項目との間の偏相関係数

偏相関	キャリア設計について、具体的で適切な目標と探究計画を立てて、主体的に探究活動を行い、自分自身や地域社会等の将来の可能性を広げる内容について述べている。	スタンダードとキャリア設計について、今後の具体的な展望を持ち、その達成に向けて時期を明確化した行動計画を立てて着実に実行する決意を述べている。	自分のキャリア設計やスタンダードの目標や計画等について、先生等と話し合ったり、進路と自分の進路(希望先)と比較して見直したりより詳しく考えたりしたことについて、どのような話を話しているか。	話すことになっている内容を、言い方(声の大きさや明確さなど)を工夫してわかりやすく、時間内に話すことができる。	話している内容が、相手に伝わるように、理由や例を挙げて説得力のあるものにして、論理的・一貫性を持ち、的確に伝えるべき内容が適切に伝わるように話している。
	.24	-.07	.02	.03	-.15
	.16	.18	.08	-.22	-.10
	-.05	.14	-.01	.18	-.02
	.11	.05	.16	.10	-.17
	-.01	.08	.24	-.01	.10
	-.05	-.14	-.12	-.23	.15
	.05	-.09	.01	.23	.06
	-.12	-.02	.02	.10	.14

表17 14の資質・能力のルーブリックと他のルーブリックの関連性 (相関係数)

場面	ルーブリック	コミュニケーション力 教員用	協働力 教員用	企画設計力 教員用	思考力 判断力 教員用	表現力 教員用	リーダーシップ 力 教員用	自己コントロール 力 教員用	学び方 教員用	時間管理 力 教員用	数的処理 力 教員用	読解力 教員用	情報リテラシー 教員用	健康管理 能力 教員用
キャリア設計・探究	キャリア探究	-.08	.00	.15	.12	.21	.08	.13	.22	.29	.09	.12	.12	.29
	スタンダードへの努力	.00	.01	.06	.17	.26	.15	.16	.07	.12	-.14	.17	.03	.24
発表	主体性	.29	.25	-.08	-.07	.06	.15	.16	-.06	-.02	.05	-.07	-.03	-.17
	対話	.38	.29	-.05	.05	.04	.13	.21	-.08	.05	.07	.05	.09	-.02
	設計の明言	.26	.26	-.07	.03	-.01	.15	.18	-.09	.06	.06	.03	-.07	-.09
	発表の明確性	.31	.27	.06	.12	.31	.23	.29	.02	.09	-.06	.12	.05	-.01
	発表の説得力	.36	.30	.01	.07	.20	.24	.25	.03	.14	.07	.07	.11	-.02
	課題発見	.33	.31	.20	.34	.43	.33	.49	.20	.23	.08	.34	.14	.23
小論	思考力	.19	.26	.25	.46	.35	.25	.31	.21	.29	.05	.46	.06	.28
	情報リテラシー	.27	.32	.18	.31	.20	.29	.33	.15	.26	.13	.31	.20	.16
	表現力	.37	.37	.22	.34	.14	.27	.35	.05	.20	.07	.34	.13	.04
	要約力	.32	.28	.24	.33	.23	.22	.31	.08	.24	.17	.33	.20	.17
	創造力	.30	.33	.09	.26	.22	.23	.20	.09	.16	.05	.26	.25	.17
		.33	.33	.22	.34	.14	.27	.35	.05	.20	.07	.34	.13	.04
		.32	.28	.24	.33	.23	.22	.31	.08	.24	.17	.33	.20	.17

表17を見れば分かるように、4ヶ月以上前に実施したにもかかわらず、「キャリア探究」や「スタンダードへの努力」のルーブリック評価は、14の資質・能力のルーブリック評価の中の関連した資質・能力と有意な相関が見られることが分かった。具体的には、キャリア探究は、企画設計力や学び方、時間管理能力と有意な関係があり、また、キャリア探究とは直接的には関係がないが、表現力や健康管理能力とも有意な関係があることが分かった。発表フェーズでは、探究において、主体的な学びや教師との対話が十分に行われていないと判断した。そのため、ルーブリックの評価で、主体性と対話に関して評価することを提示して、生徒に示して改善を促す試みを行った。「発表の明確性」と「発表の説得力」については、いずれも14の資質・能力のルーブリック評価の中の「表現力」と有意な相関が見られた。また、それらのルーブリック評価は、表現力以外にも、コミュニケーション力、協働力、リーダーシップ力、自己コントロール力とも有意な相関が見られた。

発表フェーズの小論文の評価については、14の資質・能力が正式に策定された後に実施したので、その資質・

能力のルーブリックを小論文に合わせたルーブリックを作成した。それらの調査の実施時期は、1ヶ月以内に実施されたものであったが、思考力、情報リテラシー、表現力、要約力は、必ずしも対応する14の資質・能力と一番相関係数が高いとは限らず、多くの資質・能力と有意な相関が見られた。

次年度は、今年度の結果を基にさらに分析を進めて、ルーブリックを改善しながら信頼性と妥当性のあるものにしていきたいと考えている。

### 3 今年度の成果と次年度の課題（※仮説の検証を含む）

今年度は、3年計画の高等学校課題発見・解決学習プロジェクトに関する本校での取組内容に関する土台となる部分について、企画立案しながら、教育環境を改善し、使用する教材を開発し、年間の授業の基本的な流れを策定することであった。なお、全過程においてエビデンス・ベースによる検証を行い、事業計画と行動計画、教育内容、教材、指導方法等を見直し改善して、次年度、本格的に高等学校課題発見・解決学習プロジェクトを推進していくための準備をすることを目指している。今年度、本プロジェクトの主要な教育内容及び教材開発の基礎的な部分は策定することができたと考えている。

ここでは、今年度のプロジェクトへの取組に対する成果について、本プロジェクトにおける仮説をもとに検証していきたい。まずは、仮説の条件部分は、「尾商学において、本校で育成したい資質・能力を具体化し、尾商検定として生徒にも具体的に分かる指標として提示するとともに、個々の生徒にその指標に係る目標を具体的に考えさせ、個別指導を行うとともに、全教職員がその目標実現を考慮に入れて、教科指導や進路指導、生徒指導、学級経営、学校行事、等を改善して工夫して行えば、」としたが、これまでのところで述べたように、今年度一定程度の取組ができたと考えている。そこで、ここでは、仮説の結果部分「生徒の一人一人の資質・能力は向上し、学習に対してより学習意欲が高まり、資格等の取得も向上し、充実した高校生活を送ることができるであろう。」について、エビデンス・ベースで成果を検証し、課題を発見するとともに、次年度の改善計画について検討していきたい。

#### (1) 今年度の成果

##### ① 本年度の「対話」に関する問題点と改善計画

表18を見れば分かるように、対話に関するルーブリックは、発表に関するルーブリックと正の関係が見られたが、その他のルーブリックとは負の関係になっていた。このことから、探究フェーズにおいて、教師と生徒との対話は主に発表に係る対話となっており、探究を深める上で十分な役割を果たしていなかったと予測できる。

次年度は、IDパスポート等を活用し、教師と生徒の対話が探究を深めたり3人以上の先生等と対話したりすることができるように、対話のスケジュール等を工夫する必要がある。本来的に、生徒と教師との対話は、カウンセリング・マインドによって、学習者に探究内容を振り返らせたり、手続的知識を伝えて探究の方法への支援を行ったりすることが期待されている。次年度は、年度当初から、IDパスポートが十分に活用できる状況にした上で、生徒と教員の対話が促進されるように研修会を行うなどして改善していきたい。

##### ② 成績との関係について

本プロジェクトの仮説検証において、本プロジェクトの企画を行えば、生徒の資質・能力は向上し、学習への動機付けが高まると仮説を立てている。このことを検証するためには、本プロジェクトの取組によって、資質・能力のルーブリック評価が高まり、各教科の

成績が伸長していくことを目指している。そこで、発表に関するルーブリック評価が、1学期中間から2学期中間にかけてテスト得点の伸びと正の関係があるかどうかを調べた。

その結果、学年別に、キャリア探究とスタンダードへの努力のルーブリック評価が、国語と数学、英語、商業の科目の伸びと関係（偏相関）を調べた結果は、表18に示したとおりである。この結果から、1年生については、スタンダードへの努力やキャリア探究は、商業にとってマイナスの関係があり、スタンダードへの努力は、国語科にプラスの関係があり、数学にはマイナスの関係があることが分かった。2年生については、キャリア探究は商業とプラスの関係があり、スタンダードへの努力はマイナスの関係があることが分かった。このことから、本年度の探究活動の取組は、キャリア探究やスタンダードへの努力とともに、教科の学習に必ずしもプラスの効果

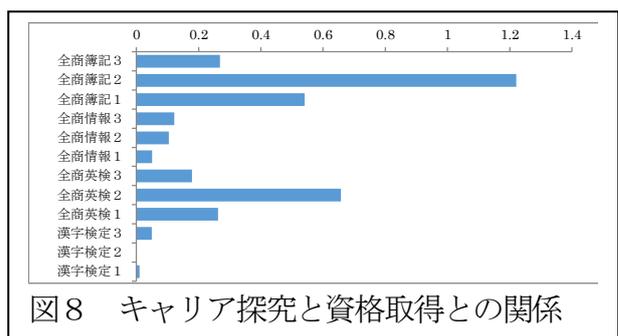
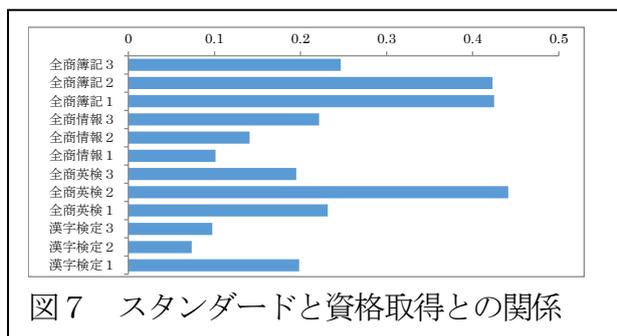
表18 ルーブリックと得点の伸びとの関係(偏相関)

学年	ルーブリック	国語	数学	英語	商業
1年生	キャリア	.07	.02	.01	-.10
	スタンダード	.10	-.14	.01	-.10
2年生	キャリア	-.01	.03	.05	.10
	スタンダード	.06	.05	-.03	-.12

を持っているとは言えないが、教科学習に何らかの関係のある取組となっていたと言えよう。そのため、次年度の取組が、教科の学習への価値を高める働きを持てるように工夫していく必要があると言える。

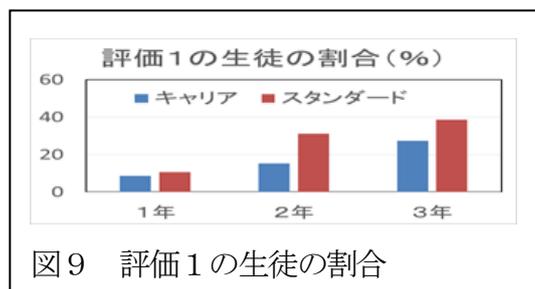
### ③ 資格取得との関係から見た妥当性

仮説の結果として、「資格等の取得も向上」することを期待している。そこで、ポートフォリオに関するルーブリックについて、資格取得との関係を調べた。その結果は、スタンダードへの努力については図7に、キャリア探究については図8に、それぞれ示したとおりである。この結果は、キャリア探究の場合もスタンダードへの努力の場合も、資格の関係では1割程度しか説明できないことが分かった。しかし、資格の上位級（全商簿記2級と1級、全商英語検定2級）の合格者は、ポートフォリオのスタンダードへの努力やキャリア探究と正の関係があることが分かった。これらの結果から、キャリア探究もスタンダードへの努力についても上位の検定を目指している生徒にとっては、資格取得と正の関係性があることが分かった。



### ④ 主体的な学び

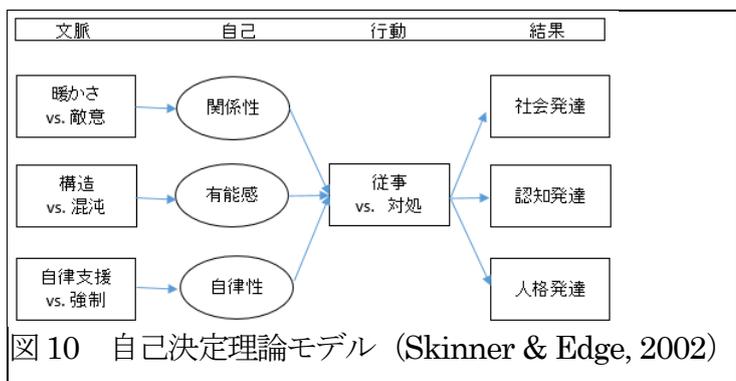
総合的な探究において、今年度は、生徒が探究する時間が十分には取れなかったが、生徒は発表については一定程度の内容のものが発表されていた。探究フェーズにおける生徒の主体的な学びの状況について調べるために、教師が生徒のキャリア探究評価とスタンダードへの努力評価に1と評価した者の割合を調べた。その結果は、図9に示したとおりである。この結果から、全ての生徒が一定程度の発表を行っていたにもかかわらず、それまでの活動においてほとんど何もしていない生徒がおり、しかも、学年進行にともない増加している傾向が見られた。



## (2) 次年度に向けた課題と改善計画

### ① 探究活動の構造化

Skinner and Edge (2002)は、自己決定理論において、活動に主体的に従事させるためには、学習者に、(i) 対話を重視した活動を行い、関係性を高めること、(ii) 探究活動を構造化して、有能感を高めること、(iii) 活動支援を行い、自律性を高めることが必要であると考えている。この理論に基づいて、次年度は、探究活動において、下記のことに取り組むことを計画した。①教師と学習者の対話、教師以外の人と学習者の対話について、



ID パスポートを活用したり、対話の機会を組織的に提供したりして、関係性が高まるようにする。②探究活動を

学習者がゲーム感覚で行う活動に変えることにより、探究活動の構造化を図り、有能感が高まるようにする。③本年度十分に活用できなかった支援教材であるミッションを活用したり、カリキュラム・マネジメントによる教科横断的取組を行い、思考ツールや発表ツールを学習したりして、自律した探究ができるように取組を工夫したい。

今年度、探究活動を個別学習で行ったが、グループ学習は、アクティブ・ラーニングを推進するための基本的な学習法であり（ボンウェル・エイソン，2017）、21世紀スキル等の資質・能力の1つである社会性等を育てるために必要不可欠である。本年度、3学年の場合、学校での実質的な探究の期間が3ヶ月程度しかなかったため、グループ学習が十分にできなかった。これは、本年度の探究活動の問題点であり、次年度解決すべき課題である。しかし、昨年度のアンケート調査の結果、本校の特徴として、教師との対話や生徒のペア学習においては、積極的に取組傾向が見られるが、グループ学習ではあまり生徒が積極的に取組まない傾向が見出されている。そのため、グループ学習を行う場合については、探究活動を構造化した授業にするとともに、学習者の支援を計画的に行う必要であると考えられる（Marzano et al, 2017）。

## ② 今年度の課題

### (i) 各フェーズのルーブリックを改良すること

今回ルーブリックを実施する中で、信頼性や妥当性の面から改善すべきものが見出された。それらの項目について、改善していく必要がある。

### (ii) 年間計画に基づいた適切な時間数を確保すること

本年度は、実質的に9月から本プロジェクトを指導したため、キャリア設計フェーズが1時間しか取れない状況の中でスタートした。次年度は、年間計画に基づいて、3つのフェーズ（キャリア設計フェーズ、探究フェーズ、発表フェーズ）のバランスを取りながら、本プロジェクトの目的を達成できる取組にしていく必要がある。

### (iii) 夏休みの途中に探究を支援する時間を確保すること

本年度、7月に1時間のキャリア設計フェーズの時間しか確保できなかったため、夏季休業中の指導を入れたかったが、年度当初から計画していなかったために、実施できなかった。次年度は、年間計画を見通して夏季休業中の登校日に探究活動の指導ができる体制にしていく必要がある。

### (iv) 担当者

尾商学は1単位の学校設定科目であり、授業担当者は、40名に対して1名の配置となっており、しかも該当クラスの授業さえも担当していない場合があった。そのため、授業運営を円滑に行うことができない状況が生じていた。次年度は、尾商学の担当者には学級担任を配置し、副担任とのTTで運営できる状況にしていきたいと考えている。

### (v) IDパスポートによる教員との対話

本年度キャリア設計フェーズにおいて、IDパスポートの活用方法を理解させた上で、IDパスポートを作成させて、IDパスポートを活用しながら定期的に教員との対話による振り返りの時間を十分に提供することができなかった。そのため、教師との対話が、探究活動を深めることができるように効果的に実施できなかった。次年度は、IDパスポートをキャリア設計フェーズで指導して記入させた上で、教師との対話の時間を確保し、探究活動の振り返りができるようにしていきたい。

### (vi) 探究活動の構造化

本年度は、探究活動が学習者の主体的な探究に委ねられることが多く、しかも、教師と生徒との間の対話を生かす指導体制ができていなかったために、探究活動の時間において何を探究すればよいのか分からない学習者を多く出してしまった。そこで、自己決定理論に基づき、探究活動を構造化し、生徒の主体的活動を引き出せる探究活動の場を設定し、表19に示したように、ゲーム的な要素も取り入れながら、楽しい探究活動となるように改善していく必要がある。

### (vii) 自律性を高めるための支援

本年度、探究活動で行き詰まった学習者向けのミッションを準備して配布していたが、何をしたらよいのか分からない学習者に対して、ミッションを行わせるように、指導者に依頼するように指示が徹底されていなかった。

そのため、ミッションを主体的に活用した生徒はいたが、教師との対話の中でミッションに取組状況になっていなかった。次年度は、ミッションを活用するとともに、カリキュラム・マネジメントに基づく教科横断的な取組を通して、思考ツールや発表ツール等を活用できる学習者を増やしていきたいと考えている。

### (3) 学年別探究活動の計画の概要

探究活動では、評価は学年別で統一して行うが、個々の授業は担当者がモデル授業に基づいて、工夫して実施する。

表 19 探究活動の年間計画（構造化した授業）

学年	前期（個人ベース）	後期（グループベース）	基本
1年	サクセス・ストーリー表彰	企業PR 対抗戦	自己探究
2年	職業・学科の比較検討	企画課 新規企画と求人条件	社会探究
3年	自己実現・地域探究(1)	自己実現・地域探究(2)	自己実現・地域探究

※社会の資源の活用，学校行事（校外研修，修学旅行，尾商デパート，インターンシップ等），  
 ※カリマネ（教科；課題研究，探究関連授業等）

#### ① 1年次

##### ● 1年次前期 TTにおいて【個別学習】8時間 【活動】

〔授業モデル〕

テーマとその内容でのタスクを説明し、評価基準を提示する。一定時間自分で構想を書かせる。また、どのように探究すればよいのか、小論文の完成例を示して、いくつか例を示す。その上で、次の時間に、進路別でOBやOGのサクセス・ストーリーを話してもらおう。例えば、会社の社長等に40分で、生徒が将来成功するために、高校時代に資格の取得や現在の自分の好みではなく、色々な学習をしておく、将来生かせるといった内容について話してもらった上で、社会で成功するための秘訣を語ってもらおう。その講義もヒントにしながら、自分自身のサクセス・ストーリーを書く。2つのグループに分かれて、発表してもらい、探究と発表の評価を行う。

##### ● 1年次後期授業 テーマ別において【グループ学習】8時間 【活動】

〔授業モデル〕

尾三地区の企業の中から、職種等を考慮に入れながら、中・大企業を選択し、会社の仕事内容とその魅力、そして、採用条件等を説明した上で、どのような人材を求めているのか、その理由を含めて説明する課題を設定する。生徒に調べ学習を行わせるとともに、校外学習又はインターンシップで、その企業を訪問して、必要な事項については、インタビューやアンケート等を実施して情報を収集するように、調べ学習を行わせる。こうして収集した情報を分析したり考えを深めたりして、求人用のプレゼンテーションを行ってもらおう。その際に、そのプレゼンテーションを基に評価し、順位を決める。

#### ② 2年次

##### ● 2年次前期 TTにおいて【個別学習】8時間 【活動】

〔授業モデル〕

進路別に、各自で5つ以上の職種や学科等について、選択して、次の活用を行う。比較する項目については、共通項目（給与、仕事内容、就業時間、福利厚生、退職金、再雇用制、等）が10つと、個人選択項目5つについて調べる。具体的には、職種間の違いを調べて、その違いを表にして、比較・対照し、それぞれの職種の短所や長所、個人による嗜好等の観点で予測される結果等について報告する。学部学科間の違いを調べて、その違いを表にして、比較・対照させる。そのことについて、学年全体で、ポスター発表を行い、評価しあって順位を決める。

● 2年次後期 テーマ別において【グループ学習】 8時間【活動】

〔授業モデル〕

会社の中で希望の高かった企業8社程度を選び、会社の組織や仕事内容を調べて、その会社が発展するための方法について、提案する内容を考える。グループごとに、くじによって企業を決める。グループごとに、修学旅行等において会社調べを行い、会社の経営を発展させるためにどんな貢献ができるかを考えるとともに、会社を改善するための企画を提案する。また、会社の人事担当として、会社を紹介するとともに、会社を伸ばすための企画を達成できるような人材を集めるための求人条件を考えて、求人活動を行う。生徒は、1年次に考えたサクセス・ストーリーの自己プロフィールをもとに作成したり、架空の人物のプロフィールから選んだりして履歴書を作成して提出する。各会社は、5名ずつを採用する。この活動を通して、会社や仕事内容について知識理解を深めるとともに、求人に対する採用される自分を認識し、採用されるものとして資格や学習、資質・能力の改善等について自己学習意欲を高める。

③ 3年次

● 3年次前期 TTによる【個別学習】 8時間【活動】

〔授業モデル〕

自己や地域社会の発展のために、調べ学習を行い、その中で見出した課題の中から選択し、探究テーマを設定する。その課題を解決するために、会社訪問や調べ学習、アンケート調査等を行い、探究活動を行う。その結果をもとに、探究活動を行って、その課題を解決する答えを見出す。3年生は、企業や関連施設等について調べたり訪問したりして、個人探究の成果をまとめる。

● 3年次後期 テーマ別において【グループ学習】 8時間【活動】

〔授業モデル〕

決定した進路先で、成功を収めるためには、どのようなことを高校生活で行えばよいのか、計画を立てて実行する。また、前期に個人研究した内容について、類似したテーマ別にグループを作って、分担を決めて、探究活動を行う。その際、必要に応じて、調査や会社訪問、施設見学等を行うなどして、まとめ等を行い、最後に発表を行う。

(4) 次年度に向けて

現在、委員会で次年度に向けた計画の概要を策定した段階である。今後、その計画に基づいて、校内全体で検討しながら、具体化を図っていくことにしている。